

和田酒盛

祐成 曾我十郎

虎 大磯遊君

義盛 和田小次郎

トモ 同従者

狂言 虎の従者

母（狂言） 虎の母

朝比奈 朝比奈三郎

時致 曾我五郎

地は 相模

季は 四月

祐成詞

「是は曾我の十郎祐成にて候。さても頼朝富士の御狩に御出で候。定めて敵の祐経も。御供申さぬ事あるまじ。我等も人並に罷り出で。何ともして祐経を討たばやと存じ候。此度御供申し。故郷へ歸らん事も難う候へば。大磯に罷り越し。虎に暇乞申さばやと存じ候。

虎サシ

「あの唐櫃の中なる物具を。夫の十郎殿に着せ申し。思ふ本望遂げさせばやと。思へばぬるゝ袂かな。

祐成

「祐成は。かくと聞くより磯の波。く。立ち寄らばやと思へども。さしも弟時致が。言ひし事よと扣へたり。

虎

「虎もそれぞと見なしつゝ。悲しやな思はずも。思はれ顔の言の葉を。言ひつる事よ今更に。面ぐるし恥かしや。

祐成

「げにや契は浅からぬ。とは思へども言の葉に。なるもならぬも山城の。こまのわたりにあらねども。

瓜田に沓を履み捨て。李下に冠をたゞさざれと。
いへどもさすが逢ふ事の。烏帽子直垂かきつくろ
ひ。如何に珍しやと。いふばかりなき心かな。

義盛「是は和田の義盛にて候。若宮八幡に社参申し。只
今下向申し候。又是より大磯へ立ち越え。虎に酒
を一つすゝめばやと存じ候。誰かある。

トモ「御前に候。

義盛「長者が処へ立越え。会所に各ある間。虎に出で、

酌とれよと申し候へ。

トモ「畏つて候。如何に此内へ案内申し候。

狂言「誰にて渡り候ふぞ。

トモ「和田の義盛と申され候。会所に皆々ある間。虎御
前に出で、酌を御取りあれと仰せられ候。

狂言「暫く御待ち候へ。やがて御返事を申さう。

狂言「如何に申し候。和田の義盛御出で候ひて。虎御前
に御酒一つ申し度き由仰せ候ひて。会所に皆々御座

候。急ぎ御出でありお酌を取られよと仰せ候。

母

「あらめでたや。虎に其よし申し候へ。」

狂言

「如何に虎御前に申し候。和田の義盛其外御一門。皆々御座候ふ間。御出であれと仰せ候。」

虎

「安き程の事には候へども。今朝より何とやらんまどひて候ふ程に。時移つて参るべきよし申し候へ。」

狂言

「其よし虎御前に申して候へば。今朝より何とやらん御心地まどひて候ふ程に。重ねて御出であるべ

きと仰せ候。

母

「さて十郎殿は渡り候ふか。」

狂言

「さん候。」

母

「それは十郎殿事を思ひて。出づまじきよし申し候。十郎殿に此よしを申せ。此度座敷へ虎が出でぬは。何とも長が迷惑ぢや。あの義盛は頼朝の御事をさへ申さるゝまゝぢや。まして我等ていの者は。御意に背きては。此処の住居かなふまい。何ともし

て御座敷へ出づるやうに御申しあれと申せ。もし
虎が出でずは。十郎殿重ねて大磯がよひ無益ぢや
と申せ。あら腹立やく。

狂言

「如何に申し候。御異見あり御出だし候へ。もし御
出でなくは。重ねて十郎殿御出で叶ふまじきよし
を仰せ候。

祐成

「是にて委細承りて候。如何に虎御前。只今母御よ
り仰せ候ふは。此度御出でなくは。重ねて我等が

参ずる事もむやくと仰せ候。真平我等にめんど給
ひ。御出であつて給はり候へ。

虎

「仮ひ母の御勘当は蒙るとも。座敷へは出づまじく
候。

祐成

「あら有難の人の言葉やな。かほど志深き人を。座
敷へ出ださぬ物ならば。末代曾我の家の恥辱さり
ながら。さても無念の次第かな。今日この頃祐成
が。頼めたらん遊君に。出で、酌とれといはうず

る者こそ覚えね。昔は伊藤北条畠山とて。劣り
勝る事は無けれども。君に捨てられ申し。此仕義
なれば身を恥ぢて。

地「はや御出での山吹の。く。口なしなれやともか
くも。返事はなくて泣くばかり。

祐成「あはれげに。世が世ならば疾くにも迎へ取るべき
に。心と憂き目を見する事よ。思へば侍の。貧ほ
どの恥はよもあらじ。

詞「如何に虎御前。某も座敷へ出で候ふ程に御出で候
へ。

虎「あら嬉しや。さらば参らうずるにて候。

祐成「義盛の御出で。又朝比奈殿御出での由申し候ふ間
罷り出でゝ候。

義盛「御出で祝着申して候。

母「如何に虎御前。此盃にて一つ飲み。何方へなりと
も。思はうずる人の方へさし給へ。

虎 「うたての母御の仰やな。思ひざしとはさて如何に。

地 「虎は盃しづかに取り上げ。く。人づてにさゝば

奪はれやせんと。身づから酌とり義盛に向ひ。思

ひざしと承れば。思はずざしは偽に。ならんも恥

かし。十郎殿とさしおきけり。

祐成

「祐成左に盃うけとり。のがれんかたも。片膝おし
たて思ひ定め。

虎

「如何に義盛。朝比奈聞き給へ。思ひざしは力なし。

よその恨よもあらじと。とうく受けてぞ飲み
ける。

義盛

「如何に祐成。思ひざしを飲むは習ひ。など一礼は
なきぞ。誰かある。祐成をおつたて候へ。

朝比奈

「暫く。めんく静まり候へ。如何に祐成。親にて
候ふ者は忘却いたし。筋なき事を申し候。某に御
放心候へ。

祐成

「あふ中々の事。某を追ひ立てん者は。天が下には

覚えぬなり。但し義盛立ち給はゞ。祐成も立たん。

地

「三浦の一門九十三騎。我もくゝと長刀太刀の。鰐元くつろげ。かけよげに見えたりける。

祐成

「時致つねぐ申すことは。

地

「時致つねぐ申す言葉の。末こそ今は恥かしう候へ。大事のかたきを持ち給ふ御身の。大磯がよひを止まり給へと。くれぐゝ申しゝを。知らず顔にて年月かよひ。只今こゝにて死なん命。弟といひ

ながら。他人よりも。時致こそは恥かしけれ。

(時致出づる)

地

「朝比奈は是を見て。くゝ。さては時致五郎殿か。はや出で給へと座敷を立て。障子のはづれに漏れ出でたる。五郎が具足の草摺三ながれ。たゝみあげてえいやと引けば。

時致

「時致も朝比奈が。

地

「力を三浦江出でし所に。少しも騒がずふんばつ

たり。互に上にはさらぬやうにて。下にてえいや
くゝと相引の。革横縫をばらりと引き切り。朝
比奈うしろへはたところべば。たはふれぞかしと
祐成立つて。朝比奈をば抱き立て。五郎をば引
き出だせば。兄が手にはやすくゝと。引かれて
出づる杣板の。目をさましたる酒盛かな。

義盛
「あつぱれ箱根にて見し時よりも。御器量いやまし
て候ふさりながら。少し此処をくつろげられ候へ。

時致
「我兄弟は貧なる者にて。御前へ出づる事なければ。
座敷のやうをも知らぬなり。

祐成
「如何に時致。是へ出で一さし舞ひ給へ。

時致
「さらば朝比奈と相舞に舞はうずるにて候。

朝比奈
「中々相舞に舞ひ申さう。

地
「目をさましたる酒盛かな。 (二人男舞)

地
「舞の手に。くゝ。あまたの品あり。桑を採る採桑
老。桴をとるはつちやう。蛇をとる還城楽。さて

一さしは扇の花房。かざしの袂。いろ／＼なるに。
是は引きかへて。さす手も太刀刀。引く手も腰刀。
五郎も朝比奈も。舞をば舞はで誠は腕立。事長引
かば悪しかりなんとて。兄弟に虎親子。朝比奈に
義盛。引き分け引き連れ。舟や車の和田にて帰れ
ば。曾我にと急ぐ。事ゆゑなきこそめでたけれ。